

6年制卒業薬剤師を新しい時代に生かす受け皿の心得

内山 充

薬剤師の歴史に残る「教育制度改革」による6年制卒業生が誕生した。6年制の薬剤師教育は、従来の4年制の教育体系が、時代に即応した薬剤師の実務を始めるのには質、量ともに十分な教育とはいえなかったところを抜本的に改変して、薬剤師として実務につく上で必須の知識、技能、心構えの基礎を学び取れるようにしたものである。何事によらず改革と言うものは、それが実施された精神は正しく立派なものであって、それを結果としてよいもの出来るかどうかは後世代の人間の出来次第といわれるから、薬剤師教育制度改革を、わが国の人と社会にとって価値あるものにする責任は、新卒業生を受け入れる受け皿であるわれわれにある。

年限が6年であろうと4年であろうと、大学教育はあくまでも基礎であり、卒業して国家試験に合格すれば実務の薬剤師として社会に通用する力量が備わるものではない。医薬品の適正な使用に関して、人それぞれの生命と健康を守るための最適な判断を常に要求される薬剤師の職責と、現代の医薬・医療の進歩や社会需要の変化の激しさを見れば、薬剤師として他人に迷惑をかけない実務に従事するには、卒後少なくとも数年間の経験と研修が必要であり、さらに一人前の医療職である薬剤師として恥ずかしくない業務を続けるには、4卒6卒を問わず、まず生涯研修を通じての「自分作り」に努めなければならない。

従来の4年制教育で大学時代の学習内容に不足する部分があったとしても、それは薬剤師実務活動の場では決して無為に放置できるものではないから、既卒の薬剤師の大部分は、卒後の実務活動の中での生涯研修によって、不足部分を既にほぼ補完しているといえる。したがって、いつまでも教育年限の差をあげつらう必要はない。既卒者があたかも6年制卒業生より劣っているような表現をするのは敗北主義であり、現薬剤師の生涯学習努力に対する冒涇行為でもある。

新たに登場した6年制の卒業生に対して、有識者から多くの期待や激励の言葉が投げかけられている。しかし新教育制度によって薬剤師の抱える懸案事項が一気に解決されるものでもなければ、ましてや自ら宣伝すべきものではない。期待に応えるための具体的方法や条件を示し、その実施活動の場を整えて使命達成に導くのは既存薬剤師の仕事である。

既存の薬剤師は、決して立ち止まっているわけではない。薬剤師の抱える懸案事項の解決を目指して、新しい社会的価値を作り出すために常に前進している。そして6年制卒業薬剤師はそのための駆動力あるいは強力な手助けとなるに違いない。

そのような、心ある現薬剤師集団の動きを新卒業生に示すことによって、薬剤師全体が一致して同じ意思のもとに、人々のために尽くせる働きの出来る場を作ること、及び新卒の薬剤師がそのための明確な目標を持てるように、有機的に連携された系統だった生涯研修の体制を構築することを、受け皿としてのわれわれの大切な心得と知るべきであろう。評価は他人によってなされるものである。新しい素質を持った6年制新規卒業生の参加により、薬剤師活動がどのように充実し変化したかを、外部社会から認知し、評価してもらえるような実績を作ることが、現段階でのわれわれ既存の薬剤師の成すべきことであり役割である。

(2012. 4. 10)